

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

1910~20年代の船の楽士： 国内の洋楽受容・分化との関連

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武石, みどり, Takeishi, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1312

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



1910～20年代の船の楽士—国内の洋楽受容・分化との関連

武石みどり

本論文は、1912年から1929年の間に北太平洋航路の客船に楽士として乗り組んだ人々を対象として、乗船記録を基にその氏名を確認し、彼らの出自と下船後の活動状況を確認することにより、そこにどのような人の動きがあり、それが大正～昭和初期の国内の洋楽受容・分化とどのような関わりをもっていたのかを明らかにすることを目的とする。

1. 船の楽士とは／調査方法

東洋音楽学校の創立者鈴木米次郎（1868-1940）は、卒業生の職場開拓のために東洋汽船と楽士派遣契約を結び、1912年8月4日に横浜を出港した地洋丸（サンフランシスコ行き）を皮切りに、ヴァイオリン・チェロ・クラリネット・トランペット・ピアノ¹の5名1組が乗船するようになった。この時の契約内容を示す資料は現存していないが、1918年から乗船を開始した保坂連治は初任給が50円、1925年の最終航海時の給与は150円と伝えている（東京音楽大学1972：29）²。

楽士として乗船した人々の名前はこれまでも先行研究（東京音楽大学1972、内田1976、大森1986、武石2007）で言及されてきたが、本論文では米国入国記録データベースの中に含まれる乗船名簿³によりその名前を調査し、地洋丸・春洋丸・天洋丸・さいべりあ丸・これや丸・諏訪丸・鹿島丸・香取丸・伏見丸の1912年～1929年までの合計303回の米国行き航海⁴に乗り組んだ楽士の全体像をつかむことを目指す⁵。さらに、これらの名前の人物が国内で活動した記録について、東洋音楽学校と東京音楽学校の各種記録、劇場プログラム、映画館の週報、ダンスホール関係の雑誌記事等を調査することにより、楽士の乗船前と乗船後の活動を明らかにする。

1 クラリネットの代わりにフルート、チェロの代わりにトロンボーンを入れることもあった（東京音楽大学1972：21）。

2 以下、本稿で扱う船の楽士の生没年については本文中に記載せず、判明した情報のみを以下の表2の経歴欄に記載する。保坂の回想内容とは異なり、乗船記録によれば保坂の最終航海は1926年5月であった。1926年に東洋汽船を吸収した日本郵船と東洋音楽学校との間の契約書は3通現存している（日本郵船歴史博物館所蔵）。1930年の契約では、楽士は演奏時にタキシードを着用し、5人乗船の場合に月額745円、6人乗船の場合には950円が日本郵船から東洋音楽学校に支払われることになっていた。いずれも、当時の大学卒業生の初任給の約2倍に当たる金額である。

3 ウェブサイト www.ancestry.com の情報による。目的地のサンフランシスコ、シアトル、または経由地のホノルルで入港する際に提出された乗員リストの中に、musician または bandman として記されている。

2. 船の楽士のリスト

上記調査により確認できた船の楽士は、次ページの表2に示した計180名である。

同一人物の乗船回数は1回から72回までと多様であった(表1)。当時の日米航路では同じ船が1年間に平均4回往復しているので、4回続けて乗船すれば1年の経験者と考えられる。1年未満で船を下りた人も多く、180名のうち133名(74%)が乗船回数9回以内(1～3年の乗船)であった。その中で、乗船回数10回以上の楽士はベテランと言えよう。1人とびぬけて乗船回数の多い河合磯次(72回乗船)は16年にわたって船の楽士を務めた。

表1. 船の楽士の乗船回数

乗船回数	1～3回	4～9回	10～19回	20～29回	30～39回	72回
該当楽士数	73名	60名	21名	19名	6名	1名

180名のうち、乗船前の経歴が確認できた人数は72名(全体の40%)で、東洋音楽学校卒業生24名(中退?7名)、浅草あるいは六崎等の民間音楽団⁶出身者14名、三越・松坂屋等の少年音楽隊出身者11名、陸軍軍楽隊出身者5名、海軍軍楽隊出身者3名、宝塚養成所⁷出身者3名、東京音楽学校卒業2名(中退?3名)である。すなわち、東洋音楽学校が派遣元になっていたにもかかわらず、今日では東洋音楽学校との関係が確認できない人々も多く乗船していた。乗船後の経歴が確認できた人は90名で、全体の50%にあたる。表2の右端の欄に示したとおり、上陸後の活動場所は一カ所にとどまらず、多くの人が演奏の場を変えながら多様な経歴をたどったことが判明した。

4 地洋丸17回、春洋丸79回、天洋丸79回、さいべりあ丸59回、これや丸11回、諏訪丸15回、鹿島丸12回、香取丸15回、伏見丸16回の乗員名簿を確認した。

5 乗船名簿の表記は必ずしも正確ではない。例えば、波多野鑑次郎(こうじろう)の名前にはEijiro、Eitaro、Kowtaro、Keitaroなど、保坂連治(れんじ)の名前にはRenkichi、Renmatsuなどの表記が見られる。このように表記が異なっている場合でも、年齢や前後関係が符合する場合には同一人物として判断した。

6 ジンタとも呼ばれる少人数の市中音楽隊。明治末期から大正期にかけて、若者に無料で楽器を教え、最初は無給で、その後は手当を支給して商店街や運動会、映画館伴奏等に小グループの楽士を派遣する組織が作られ、バンド屋とも呼ばれた(大森1986:114-117)。

7 大正中期から宝塚少女歌劇団に設けられた演奏家の養成機関(大森1986:163)。

表2. 船の楽士の乗船記録と前後の経歴

	名前		乗船記録		年齢	楽器	経歴	
	ふりがな	漢字	乗船時期	回数			出身	国内
1	あいかわ にぞう		1917/10-1918/12	5	21-22	[tp]		
2	あいざわ あやお	相沢 斐雄	1918/3-1919/4	6	26-29	vc		別名相沢操一 大日本 tb、vc、1923ハタノ@東洋キネマ tb、1925チェリーランド tb、その他のダンスホール、1937東宝音楽部
3	あおき やすじろう	青木	1918/7-1919/1	3	24	[vn]		
4	あかい のぶひさ	赤井 信久	1921/1-1922/6	7	20-22	[tp]		1918帝国館
5	あがた ひでやす		1920/8-1920/11	2	25-26	[vn]		
6	あさい けんざぶろう	浅井 健三郎	1913/6/1916/10	10	19-23	vn, tp	1915東洋卒 vn	
7	あべ すえぞう	阿部 末蔵	1918/4-1919/10	4	20-22			
8	あまの ふじお	天野 不二夫	1923/5 のみ	1	25	pf	1925-26 東京音楽学校 選科 pf	1924日活館 pf、1929大阪松竹座 pf
9	いいだ みのる	飯田 實	1914/10-1921/1	27	24-30	vc	1909-1914 東京音楽学校 vc 浅草派 vc	1922金龍館 vc
10	いいぶち とうすけ	飯淵 藤輔	1913/3-1918/12	13	29-34	vc	1911東洋卒 vc	
11	いぐち しょうじろう		1929/6-1929/11	3	28			
12	いけだ けいいち	池田 景一	1921/5-1921/8	2	25	[tp]	1919東洋卒	
13	いしい まさる	石井	1928/12-1929/10	4	19-20			
14	いそべ かつらのすけ (けいのすけ)	磯部 桂之助	1927/12 のみ	1	20	vn	1908生 1923 東洋入学? vn 浅草派 cl	1925大阪の映画館 sax、松竹楽劇部 vn 昭和初年大阪のダンスホール
15	いだ いちろう	井田 一郎	1919/9-1921/4	7	25-27	vn	1894生 1909-1919 三越少年音楽隊 vn, hr	1920花月園、1922宝塚オーケストラ、1922大阪松竹楽劇部 vn、映画伴奏、1925チェリーランド結成、昭和初期コロムビア、ビクター、ポリドールの作曲家 1972没
16	いとう えいぞう		1925/3-1925/7	3	23	vn		
17	いのまた ひでまろ	猪俣 秀磨	1918/8-1920/1	4	21-23	tp		
18	いまい とめぞう		1928/6-1928/12	4	23-25			
19	いまむら りくろう	今村 陸郎	1916/1-1924/4、1929/8	22	22-30、34	pf	1895生 東洋?	1924武蔵野館 pf
20	うえだ じん[まさし]	上田 仁	1924/8-1925/3	5	22	pf	1904生 1922東洋卒	1926日響 fg 1927新響 fg、新響ジャズグループにも参加、1943東宝音楽部 pf 1966没
21	うえみや かつ	上宮 勝	1919/9-1921/12	9	20-23	tp		1923ハタノ@目黒キネマ、1924ハタノ@東洋キネマ tb、1925シネマパレス・日露 tb、1926日本交響楽協会・芝園館 hr、1927新響 hr
22	うがかみ みつお	宇賀神 光男	1920/1 のみ	1	24	cl	浅草派	1924武蔵野館 vn 1933日活作曲家
23	うだ よしお		1927/8 のみ	1			1896生 東洋?	
24	うちだ さだむ	内田	1918/10-1919/9	5	23-25	[vn]		
25	うちだ まさお	内田 政夫	1918/10、1919/10	2	27-28	vn,vc		1918葵館
26	えびさわ とういち	海老沢 東一	1927/8-1927/10	2	23	vn		昭和初期ポリドールオーケストラ vn 1936以降キングレコード vn

27	おおくま じろう	大熊 次郎	1922/6-1924/11	12	20-22	vc		1926日響 vc 1927新響 vc
28	おおつ さぶろう	大津 三郎	1921/3-1921/10	4	30	[tp]	1910海軍入隊	1923ハタノ@目黒キネマ、1925日露 drum tb 1926日響 tb 1927新響 tb
29	おおつ りょうたろう	大津	1921/12-1923/6	8	26-29	tp		
30	おおつか たいせい (やすまさ)	大塚 泰正	1915/10-1915/12	2	24	[pf]	1891生 浅草派 vn	
31	おかざき やのすけ	岡崎	1918/10-1920/10	10	29-31	[tp/vc]		
32	おかだ としすけ	岡田 利典	1924/12 のみ	1			1904生	1925三友館 vn
33	おがわ つねいち	小川 恒一	1920/8-1920/11	2	25-26	cl	1889/1899生	大日本 pf, cl、 千代田館楽長
34	おがわ よしお	小川 義雄 (義男)	1928/12 のみ	1	28		浅草派 tb	千代田館 tb、 松竹交響楽団 tb
35	おぎの せんじ	荻野 専次	1927/11-1928/2	2	27			1924武蔵野館 va
36	おくだ たきいち	奥田 瀧一	1924/10 のみ	1	21	tp		1937東管 tp
37	おくむら へいぞう	奥村 兵造	1921/12-1922/3	2	19-20	fl	宝塚養成所	1924宝塚交響楽団 fl 1933宝塚交響楽協会 picc
38	おくやま さだきち	奥山 貞吉	1914/8-1918/1	24	24-32	cl, pf	1887生 1911東洋卒 1912帝劇 cl (奥山貞一)	大日本 cl、1918金春館 1922金龍館 1924ハタノ@帝国ホテル 昭和 初期コロムビア作曲家 1956没
39	おざわ けいぞう		1913/3-1921/3	22	26-33	cl		
40	おぜき りょうたろう	小関	1923/9-1927/10	20	29-36	tp		
41	おだ えつお	小田 越男	1913/9 1918-1919	6	20-29	tp	1911-13 帝劇 tp vn	
42	おぬき よしろう	小貫	1916/3-1919/11	15	26-30	tp		
43	おの なるうじ		1924/12 のみ	1				
44	おの もりくに	小野 守邦	1914/8-1923/7	19	27-35	cl	1907陸軍入隊	
45	おのざわ くらたろう		1921/1-1926-12	12	24-29	vn		
46	おのでら ぎん		1920/11-1921/2	2	24			
47	かがた ひさみ	加賀田 久実	1921/1-1926/12	22	21-25	cl		大日本 cl sax
48	かとう しょうたろう	加藤	1920/11-1925/6	4	27-33			
49	かとう ふくたろう	加藤 福太郎	1917 / 1 - 1918 / 5, 1928/6-1928/12	12	27- 28, 39	pf		ハタノ@金春館 1921ハタノ@花月園 pf 1927芝園館
50	かとう まさなお	加藤	1923/6 のみ	1	24			
51	かとう みさお	加藤 操	1915/12-1919/10、 1926/4-1929/11	35	24-29、 36-37	cl	1891生 浅草派	大日本 cl、1923ハタノ@目黒キネマ、1924 武蔵野館 cl
52	かとう みのる	加藤	1929/5 のみ	1	26			
53	かまち こうぞう	蒲池 剛三	1914/8, 1918/7	2	21-25	vn	1911東洋卒	
54	かわい いそじ	河合 磯次	1913/3-1929/11	72	23-37	vn, pf	1910東洋卒	
55	かわぐち せいさく		1915/11-1918/12	4	23-26	[cl]		
56	かわぐち ようのすけ	川口 養之助	1921/8-1926/10	7	26-31	[cl/vn]	1896生	大正期末に大阪松竹座 オーケストラ、千日前ユニ オンの井田一郎バンド に参加 1926チェリ ランド 生駒舞踏場を 経て1932大連へ 終戦 まで満州各地 その間 1936に京都の桂舞踏場 出演 vn sax 1952没

57	かわしま つねじ		1925/12-1928/10	5	23-25			
58	かわのぼり きよかず		1927/5-1927/8	2	17			
59	かわべ たけじ		1920/12-1922/11	6	23-25	[pf]		
60	かんだう きよじ	貫洞 喜代治	1919/3-1922/3	9	19-22	pf	1901生 1918東洋卒	1923-25 武蔵野館 drum pf
61	きうち めいじ		1927/12 のみ	1	23			
62	きくち ひろし	菊地 博	1925/5 のみ	1	24	pf	1902生 青山学院?、 1921-23 東京音楽学校	1922大阪松竹楽劇部 pf 昭和初年大阪のダ ンスホール pf ポリド ール作 曲 家 pf 1929上 海でジャズを学び、帰 国後ダンスホールで活 動 pf テイチク作曲家
63	きだ くにお	貴田 邦夫	1918/7-1922/2	16	29-34	vc	1908陸軍入隊 (貴田邦尾)	1954没
64	きたがわ かのう	北川 嘉納	1922/1 のみ	1	33	vc	1907海軍入隊	1921ハタノ@花月園、 1923ハタノ@東洋キネ マ、1925日 露 vc 1926 日響 tb 1927新響 tb
65	きたむら やすじろう	北村 保次郎	1920/4-1926/1	25	26-32	cl		
66	きつかわ ただし	橘川 正	1929/5 のみ	1	19		浅草派	
67	きむら はるきち	木村	1921/7 のみ	1	30			
68	くさか しげる		1920/2-1920/8	3	30			
69	くじ はるきち	久司 春吉	1927/3-1927/10	3	24			1923キネマ倶楽部 pf
70	くぼ ますお	久保 益男	1926/10-1927/3	2	22	cl	浅草派 cl pf	
71	くろさわ たけお	黒沢 健雄/ 健二/健造	1924/9-1929/6	6	26	[cl/pf]	1913三越 fg	1926日響fg 1927新響fg 1941東京交響楽団 fg
72	こうらい さだみち	高麗 貞通	1921/1-1926/8	12	19-23	fl	1903生 1919松 坂 屋/ 三越	大日本 fl、1923 ハタノ 1927新響 fl 1931コ ロ ナ・オーケストラを 経てポリドールオー ケストラ fl 1972没
73	こだか つねのり	小高	1926/12-1928/2	7	23-25			
74	ごとう よしゆき	後藤 義行	1919/10-1924/10	20	21-26	vc	1911松坂屋 tb, vc	
75	こばやし たけひこ	小林 武彦	1913/9- 1922/12, 1929	36	24- 36, 41	vc	1911-13 帝劇洋楽部vc	
76	こまがた くにとか	駒形	1919/9- 1922/3、1927	7	25- 27, 32	[tp]	東洋?	1923 ハタノ@東洋キ ネマ drum
77	こやま きくぞう		1913/9-1915/7	9	24-26	[tp]		
78	こんどう まさじろう		1918/7 のみ	1	23			
79	さいとう さわ	斉藤 佐和	1912/8-1921/4	37	24-33	pf	1911東洋卒 pf	1933奉天ブロードウェイ 楽長、1935頃大連
80	さいとう ひろよし	斉藤 広義	1924/10-1929/8	9	22-27	tp	1903生 1918 大阪三越音楽 隊入隊	1922大阪松竹楽劇部 tp 大阪 常 設 館 tp 1926日響 tp 1927新響 tp 1927頃京都松竹座 tp 1928頃ジャズ楽団 助 演 tp 1933PCL管 弦楽団 tp 1937東宝音 楽部 tp 松竹系ジャズ 楽団 1941松竹新楽団 指揮者 1981没
81	さえき きいちろう	佐伯 喜一郎	1921/10-1926/12	22	25-31	tp		
82	さかい えいぞう	栄井栄造	1929/7-1929/10	2	41		1906陸軍入隊	
83	さかい しんじろう		1924/4-1924/6	2	27	[cl]		

84	ささい うまる	笹井 生	1913/9-1917/4	19	24-29	vn, cl	1887/89生 1908海軍入隊 1913-15 東京 音楽学校聴講 科 vn	1923京 都松竹座楽長 vn, cl
85	さとう あきお	佐藤 顕雄	1925/10 のみ	1	23	vn		1926日響 vn 1927-31新響
86	さとう あやお	佐藤	1921/7 のみ	1	19			
87	さとう ともきち	佐藤 友吉	1922/1-1924/10	5	25-26	vn	1924東洋卒	1926日 響 va 1927新 響 va コロムビア関係
88	さとう よしお	佐藤 義雄 (義夫)	1928/3 のみ	1	34		1894生 戸山 学校軍楽隊	1925大久保 tp 1926芝園館
89	さとう よしろう	佐藤	1929/5-1929/10	3	31			
90	さawai そういち	沢井 操一	1918/10-1920/12	7	20-23	cl		1922帝国館
91	さわだ りゅうきち	澤田 柳吉	1913/3-1913/10	4	27-28	pf	1886生 1906 東京音楽学校 卒 1909研究 科修了	1936没
92	しおじり せいはいち	塩尻 精八	1917/8-1922/6	22	23-27	pf	東洋 ?	1922金龍館 pf 1922大 阪松竹楽劇部 pf 昭和 初年大阪のダンスホー ル pf コロムビア、ビク ターの作曲家
93	しげとみ みきぞう	重富	1913/9-1914/5	4	21-24	[pf]		
94	しのはら しげお	篠原 茂男	1919/2-1921/10	8	24-29	tp	浅草派 tp	1917金春館、金龍館、 1922帝国館 1923ハタ ノ@東洋キネマ tp
95	しのはら まさお	篠原 正雄	1913/3-1914/10	7	20-21	cl, pf	1894生 1912東洋卒	大日本 pf、1916ロー シー地方公演の指揮 1919日本館歌劇指揮 1922金龍館指揮 1928東京松竹楽劇部 1981没
96	しもかわべ まさじろう	下川辺 政次郎	1919/6-1921/9	10	25-26	[tp]		1923キネマ倶楽部 vn
97	しらかわ ゆたか	白川	1927/2-1929/6	12	31			
98	すがい えいぞう		1927/3-1927/5	2	26			1918電気館(菅井栄蔵)、 1924日活館(須貝栄造)
99	すずき きよし	鈴木 清	1920/4-1922/1	3	20-21			1921帝国館
100	すずき ぜんごろう	鈴木 善五郎	1920/6 のみ	1	23			1926松竹館
101	すずき たかし	鈴木	1921/9-1923/12	8	26-28	pf		
102	すずき ただもと	鈴木 正一	1915/7-1921/10	16	23-26	vn		大日本 vn、1919日本 館 pf 1924 東洋キネ マ、1925日黒キネマ
103	すずき ふくじろう	鈴木 福次郎	1925/6, 1927/6	2	20-21	[cl]	浅草派 cl, sax	1928浅草電気館チェ リーランド・ジャズバンド sax その後ダンスホール で活動 sax 昭和初期ポ リドルオーケストラ sax タイヘイレコード sax
104	すなとい ぶんざぶろう	砂土居 文三郎	1915/6-1918/10	12	23-26	vn	1915東洋卒	
105	せき としろう	関	1929/2-1929/9	4	24			
106	たか げんすけ		1927/12-1928/8	4	23-24			
107	たか よしたろう	高 由太郎	1927/5-1927/8	2	30		1897生	1924横浜館 vc
108	たかぎ ごろう	高木 五郎	1926/3-1926/5	2	21-22	vn		神戸松竹 vn
109	たかくわ けいしょう (よしてる)	高桑 慶照	1912/8-1921/1	33	21-28	vc	1892生 1912東洋卒	1922大阪松竹楽劇部 vc 1926日 響 vn 1927-29新 響 vn 1924ハタノ@帝国 ホテル 1933PCL 管弦楽 団 vc 1943東宝音楽部

110	たかはし としお	高橋 利雄	1926/5-1927/3	4	19-20		1904生	1924帝国館 tp 1925深川松竹館 tp
111	たつみすな ぎいち	辰巳砂 義一	1919/3-1920-9	8	20-21	[fl/pf]	東洋 ?	
112	たなか へいざぶろう	田中 平三郎	1912/8-1922/3	33	23-32	vn	1890生 1911東洋卒	1922大阪松竹楽劇部 vn 1923いづも屋音楽隊で弦 指導 1925JOBK オーケス トラの初代コンマス 1928- 31フランス留学 1931から 京大オケを指導 1946没
113	たやま よさぶろう	田山 興三郎	1915/9-1919/3	11	22-26	tp		1922東京シンフォニー 第一回演奏会@東京 音楽学校 tp
114	たんげ きちたろう	丹下 吉太郎	1918/12-1924/8	24	20-25	tp	1911松坂屋 hr	1926日響 hr 1927新響 hr 1936新響 timp 1974没
115	つかだ みちさぶろう	塚田	1929/6-1929/8	2	25			
116	つくい ゆうき	津久井 祐喜	1921/10-1922/4	3	24	[pf]		1933宝塚交響楽協会 pf
117	つじい とみぞう	辻井 富造	1924/9 のみ	1	24	cl	大阪三越音楽 隊 cl	1922大阪松竹楽劇部 cl 1924ハタノ tp 1925日露 cl 1926日 響 cl 1927新 響 cl 1928ジャズ楽団エ キストラ 1936新響 cl 1945東宝交響楽団
118	とだ とみお		1918/12 のみ	1	29	[vn]		
119	なか(ば)よしお		1922/1-1924/2	8	22-25	[pf]		
120	ながおか とくさぶろう	長岡 徳三郎	1919, 1921, 1925	5	24-31	cl		1922帝国館, 1923松竹館
121	なかがわ きよあき	中川 清明	1919/6-1920/4	5	31-32	[vc]		1921帝国館
122	なかがわ ごろう	中川 五郎	1919/10-1921/7	7	19-22	pf	1917-18東 京 音楽学校選科 pf 1920東洋卒	
123	ながしお ひさはる	長汐 壽治	1923/10-1925/10	13	24-26	vc	1919-20東京 音 楽学校選科唱 歌 1922東洋卒	1926日響 vc 1927新響 vc 1936新響 cb
124	ながた ただお		1928/4-1929/10	4	28-30			
125	ながの ぜんざぶろう	永野 善三郎	1919/3-1923/11	18	24-28	vn	神戸音楽院、 宝塚養成所	1924宝塚交響楽団 vn 1933宝塚交響楽協会 vn
126	なかむら こうじろう (こうたろう)	中村 敏次郎	1917/8-1921/5	8	20-24	tp, vn	1911松坂屋 tp, tb	1921ハタノ@花月園 1923東京シンフォニー vn 1924武蔵野館・ハタノ@ 帝国ホテル 1925日 露 va 1926日 響 va 1927 新響 va 1929新響 tp
127	なかむら せいぞう	中村 清三	1918/8-1919/11	6	26-28		1892生	1924帝国館 vn
128	なかむら てつじろう	中村	1921/12-1922/3	2	24-25			
129	にいの しんじろう [てるお]	新野 信次郎 [芸名:輝雄]	1925/12, 1928/3-1928/8	4	23-25	[cl]	1904生 浅草千振系	キネマ倶楽部、1928井田 一郎バンドに参加 1929 日 活 館、1930-31ユニオ ン・ダンスホール sax 1933 PCL 管弦楽団 sax 昭和初期ポリドルオー ケストラ sax cl 1933PCL 1934テイチクオケ sax (東宝音楽部?) 1987没
130	にしがき てつお	西垣	1928/4-1929/4	5	28			
131	にしぎき やすみち	西崎	1924/11-1925/4	2	26/22			
132	にしざわ ぐんじ	西沢 郡司	1923/2-1923/5	3	26-27	[vc]		1924-大阪敷島クラブ vc
133	にしむら さいすけ	西村	1922/3 のみ	1	38			
134	ねやま やすぞう	根山	1926/11 のみ	1	21			
135	のなか かおる	野中	1927/6 のみ	1	26			
136	はしもと ごろく		1922/1-1924/2	9	23-26	[cl]		

137	はせがわ ちょうのすけ	長谷川 長之助	1914/6-1921/2	26	28-36	tp	1886生	長谷川秋甫の名前で活動 1923-25武蔵野館 tp 1929シネマパレス、1932ストライキで活動停止 1934静岡へ 1938没
138	はたの こうじろう	波多野 鏖次郎	1913/3-1918/4	21	21-26	tp, vn	1893生 東洋?	1918金春館 1922東洋キネマ 1922, 23東京シンフォニー vn 1924-ハタノ@帝国ホテル vn 指揮 1925日露交歓 1946没
139	はたの ふくたろう	波多野 福太郎	1912/8-1918/4	22	23-28	tp, vn	1890生 1911東洋卒	大日本 tp、1918金春館 楽長 1921花月園 1924/25日黒キネマ楽長 1927新響 vn 1933PCL管弦楽団 vn 1937東宝音楽部 vn perc 1943東宝砧撮影所 perc 1974没
140	はら かずよし	原	1922/1, 1925/4-1926/8	7	20-24			
141	はらだ ごろう	原田 五郎	1920/9 のみ	1	21	[vc]	1901生 三越少年音楽隊	1922帝国館 1924日活館 1925三友館 vc 日露 tb
142	ひぐち しげじ	樋口 繁治	1913/6-1920/12	27	23-31	vc	1912東洋卒	
143	ふかがわ じろう	深川	1921/10 のみ	1	29			
144	ふくい とみのすけ	福井	1915/9-1915/12	2	28	[cl]		
145	ふくだ そうきち	福田 宗吉	1917/8-1922/6	21	26-31	vn	1913-14 東京音楽学校 選科 vn	ハタノ@金春館 千代田館 楽長 1923東京シンフォニー vn 1926日響 vn 1927新響 vn 1933日活作曲家
146	ふくだ てつじ	福田	1921/9 のみ	1	27			
147	ふじもと けんのじょう	藤本	1928/3-1928/5	2	27			
148	ふせ まさお	布施 正男	1927/2-1927/12	6		pf	1906生	千葉の映画館で演奏 松竹管弦楽団 コロムビア専属
149	ふなばし しゅういちろう	船橋 修一郎	1918/8-1920-6	8	21-24	[cl/vn]	1897生 1911 松坂屋 cl, vn	船橋孝昌 1924日活館 vn 1925日露 vn
150	ふるさわ ひさもと	古沢 久元	1923/5-1925/5	9	19-24	vn	1919-21 東京 音楽学校選科 唱歌 1923東洋卒	1926日響 va 1927新響 va 1933JOBK va 1933 PCL管弦楽団 vn 1937 東宝音楽部 va 1939東京放送管弦楽団 vn
151	ふるやま ぎいち	古山 義一	1917/12-1919/10	8	27-29	tp	1908陸軍入隊	
152	ほさか れんじ	保坂 連治	1918/10-1926/5	30	24-32	pf	1894生 1915東洋卒	1928 神戸で小学校の音楽教員となる
153	まえだ たまき	前田 璣	1918/5-1918/10	3	19-20	vn	1899生 1917東洋卒	1922東洋キネマ・東京シンフォニー vn 1923ハタノ@東洋キネマ 1924武蔵野館・東洋キネマ vn 1925日露 vn 1926日響・芝園館 vn 1927新響 vn 昭和初期ボリドルオーケストラ vn 1939東京放送管弦楽団指揮 vn 1979没
154	まえの こうぞう	前野 港造	1921/3-1922/4	6	25	cl	1897生 浅草派園田系	大日本 cl, sax 1921ハタノ@花月園 sax 1922大阪松竹楽劇部 sax パウリスタでジャズに加わる 1923ハタノ 1925ユニオン・チェリーランド・ジャズバンド sax 1929道頓堀赤玉で前野港造楽団 昭和初期日東レコード
155	まつだいら のぶひろ	松平 信博	1914/6-1920/10	24	25-32	pf	1889生 1914東京音楽 学校卒	昭和初期ビクター作曲家 1933日活作曲家 1937東宝映画作曲家 1949没

156	まつだいら たけお	松平 武夫 (武雄)	1923/1-1923/4	2	35	[vc]		大日本、1927三友館
157	まつばら よすけ	松原 興輔	1919/3-1922/3	6	25-29	vc	1914東洋卒 1917-19東京 音楽学校選科 vc	1924東洋キネマvc 1925日露・シネマパレス vc 1926日響vc 1929 頃日米ダンスホールでタ ンゴ演奏vc 1937ユニ オン・ダンスホール楽長
158	みずの ちょうじろう	水野 長次郎	1925/3-1926/3	5	26-27	tp	1900生	1918浅草オペラ館 1924 横浜館 tp 大阪敷島クラ ブ tp 1929まで道頓堀日 の出で水野長次郎楽団 tp 1932横浜金港ダンス ホール楽長 tp 1933川崎 東横ダンスホール楽長 tp
159	みやた せいぞう	宮田 清蔵	1917/8-1921/2	13	19-24	fl	1909三越少年 音楽隊 fl	1922-23ハタノ@東洋キネ マ 1923東京シンフォニー fl 1924ハタノ@帝国ホテ ル 1925日露 fl 1926日響 fl 1927新響 fl 1936新響 fl コロムビア関係
160	むとう ゆづえもん	武藤	1921/4-1921/7	2	29			
161	むらた みゆき	村田	1918/10-1921/7	4	28-31	[pf]		
162	もちづき けいご	望月	1924/6-1925/11	3	22-23			
163	もりかわ きいち	森川	1924/11 のみ	1	20			
164	やくまる あきら	薬丸 晃	1924/12 のみ	1	24	tp	浅草派 tp	金龍館 1928上海ブルー バード・ダンスホール楽長 cb 1933奉天ブロードウェイ tp
165	やまぐち くにお	山口 都雄	1928/10-1928/12	2	29	[vn]		1923京都松竹座 vn 1927頃京都松竹座 vn 1941松竹交響楽団 vn 1943東宝祐撮影所 vn
166	やまざき ちよきち	山崎 千代吉	1921/3 のみ	1	20			1923キネマ倶楽部 vn
167	やまざわ えいじろう	山沢 栄次郎	1919/12-1921/10	5	25-28	vc		
168	やました うめきち	山下 梅吉	1925/3-1929/8	21	27-28	vc		(vc 山下 梅 夫 1933 PCL 管弦楽団 vc 1939 東京放送管弦楽団 vc)
169	やまだ けいいち	山田 敬一	1913/5-1919/7	10	28-33	cl	宝塚養成所 1909-14東京 音楽学校選科 唱歌	1923井田一郎とジャズバン ド 1924宝塚交響楽団 cl 1933宝塚交響楽協会 cl ラフティング・スターズ楽団
170	やまだ しまきち	山田	1922/3 のみ	1	25			
171	やまだ まさきち	山田 政吉	1918/10-1920/8	7	29-33	tp		
172	やまだ みつさぶろう	山田	1926/3 のみ	1	28			
173	やまだ よしじろう	山田 由次郎	1922/2 のみ	1	22	[vn]		1926松竹館
174	やまたに へいじ	山谷	1927/5-1929/11	4	27-30			
175	やまな じょうぞう	山名	1925/9-1927/3	8	27-28			
176	やまもと せいいち	山本 清一	1918/8-1929/5	25	19-29	pf	1919東洋卒	1923ハタノ@日黒キネマ pf 1939東京放送管弦楽団 pf
177	よしだ けいへい	吉田 啓平	1918/7-1921/5	12	23-26	vn		1926芝園館 vn
178	よしだ まんのすけ	吉田 万之助	1919/9-1922/11	6	24-28	tp		
179	よしむら かおる	吉村 馨	1927/12-1928/3	2	32	[fl]	1896生 六崎派 fl	1924/25松竹管弦楽団 fl 関東大震災後横浜 オデオン座 1939東京 放送管弦楽団 fl
180	わきやま しょうたろう	脇山 正太郎	1926/8 のみ	1			1923東洋卒	

注 年齢：乗船記録に記された乗船時の年齢

経歴：主に内田1976、大森1986、楽水会1984、須藤1997、武石2006、海軍・陸軍音楽隊データベース、映画館週報、当時の雑誌記事による。

出身：東京音楽学校一覧、および武石2005による。在籍・卒業記録が確認できない場合、学校名の後に？を付す。

3. 乗船者の移り変わり

1912年から1929年までの17年間に、船に乗り組んだ楽士は絶えず入れ替わり、変化した。その様相は以下の5期に分けて捉えることができる。

第1期 1912年8月～

1912年8月に地洋丸に初乗船したメンバーはすべて東洋音楽学校出身で、田中平三郎(vn)、高桑慶照(vc)、奥山貞吉(cl)、波多野福太郎(tp)、斎藤佐和(pf)の5名である。この5名が第2回航海(1912年11月)と第3回航海(1913年1月)にも乗り組んだ。紙恭輔はこのメンバーについて、「もともとクラシックの音楽しか習ったことのない人達だったので、ディナー・ミュージックを弾くことは得意だったが、毎晩夕食後にAデッキで行われるダンスパーティーでダンス・ミュージックを演奏するためには、第一に必要な楽譜の手持ちが足りなくて困った。客から曲の注文がきても、それに応じることができなかった。そこでシスコに船が停泊すると、まず楽譜屋にかけつけて楽譜をあさるのだった」と述べている。楽譜収集を重ねるうちに、ダンス音楽や当時のジャズのスタンダード・ナンバーが演奏できるようになり、客の注文にも恥をかかないようになったという(紙 1957 ③)。

その後1913年3月からは春洋丸、1913年5月からは天洋丸にも乗り組みが始まった。これに伴い、1913年3月には河合磯次(pf, vn)、小沢某、飯淵藤輔(vc)、篠原正雄(cl)、波多野鐸次郎(vn, tp)、澤田柳吉(pf)⁸が、1913年6月からは樋口繁治(vc)、浅井健三郎(tp)、山田敬一(cl)、1913年9月からは小林武彦(vc)、笹井生(cl)、小田越男(tp)、重富某が加わった⁹。このメンバーの大半は東洋音楽学校に在籍していた人物である。東洋音楽学校との関係が確認できないのは澤田柳吉(東京音楽学校)、山田敬一(東京音楽学校選科)、笹井生(海軍軍楽隊、東京音楽学校聴講科)、小林武彦(帝劇洋楽部)、小田越男(帝劇洋楽部)、およびフルネームの判明していない2名(小沢、重富)であるが、澤田らの経歴から見て、演奏能力の高い人材を採用する方針であったことがうかがわれる。1915年4月頃まで、このメンバーと前述の第1回メンバーとが、地洋丸・春洋丸・天洋丸の3隻に様々な組み合わせで乗船した。

尚、上記の楽士名に付した楽器名は、本人や仲間の回想を基に、また船を下りた後の活動状況から推測されるものである。しかし、必ずしも1種類の楽器だけを演奏したわけではなく、楽士の組み合わせから見て同楽器が2人となってしまう場合があるため、その際にはそのうち

8 この6名の初乗船について、波多野鐸次郎は「横浜から船に乗って、観音崎を出るや否や楽員全員が船酔いして、ハワイに着く前日まで演奏ができなかった(中略)ホノルルに着く前(中略)初めて演奏できるようになった」と回想している(波多野1942: 100-101)。

9 天洋丸の1913年7月の航海では、高桑慶照と澤田柳吉がフィリピン人楽士3人と組んで演奏した。1913年5月の春洋丸の航海でも、日本人楽士として記録されているのは高桑と澤田の2名のみである。しかし、フィリピン人との組み合わせはうまくいかなかったようで、その後は日本人楽士のみのバンドが乗り組んだ。

の1人が別の楽器を演奏したと考えられる¹⁰。

第2期 1914年夏～

この時期、長谷川長之助 (tp)、松平信博 (pf, 東京音楽学校卒)、飯田實 (vc, 東京音楽学校中退)、鈴木正一 (vn)、加藤操 (cl, 浅草派)、加藤福太郎 (pf)、福田宗吉 (vn, 東京音楽学校選科)、塩尻精八 (pf) らがメンバーに加わった。これらの人々が東洋音楽学校に在籍した記録は見当たらない。松平と飯田の両名のみ、東洋音楽学校の繋がりを示す資料が1点現存している。1916年9月1日に京都のYMCA ホールで行われた杉江音楽学館の秋季音楽大演奏会のプログラム (東京音楽大学付属図書館所蔵) で、この演奏会では、東洋音楽学校附属東京オーケストラの演奏の合間に独奏者として波多野福太郎 (tp)、松平信博 (pf)、蒲地剛三 (vn, 東洋卒業生)、飯田實 (vc) の名前が挙がっている。

1916年3月31日に地洋丸が座礁したのち、1916年10月からはさいべりあ丸、1917年8月からこれや丸への乗船が始まり、春洋丸、天洋丸と併せて4隻に第1期と第2期の乗船者がさまざまな組み合わせで乗り組んだ¹¹。どの組み合わせにおいても、後進を指導するべく、必ず第1期のメンバーが1名以上含まれていた。

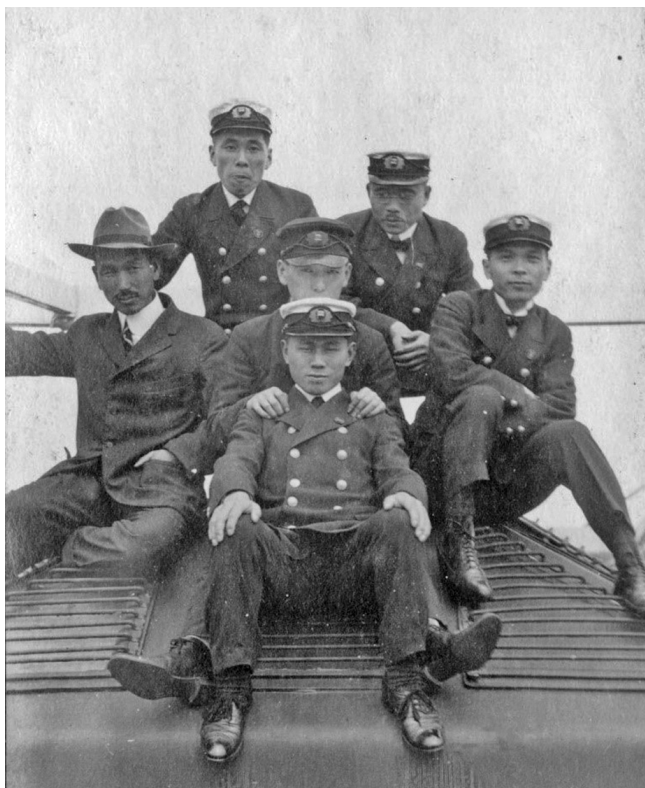
第3期 1918年5月～

第1期以来中心的な存在であった波多野兄弟、奥山貞吉、篠原正雄、笹井生がメンバーからはずれ、新たに前田 璣^{たまき} (vn, 東洋卒業生)・貴田邦夫 (vc, 陸軍軍楽隊)・山本清一 (pf, 東洋卒業生)・保坂連治 (pf, 東洋卒業生)・丹下吉太郎 (tp, 松坂屋少年音楽隊)・永野善三郎 (vn)・松原興輔 (vc, 東洋卒業生)・貫洞喜代治 (東洋卒業生)・井田一郎 (vn, 三越少年音楽隊)・上宮勝 (tp, 浅草派)・後藤義行 (vc)・高麗貞通 (fl, 松坂屋少年音楽隊)・前野港造 (cl, 浅草派) らが主要なメンバーとして加わった。1917年9月に、日本郵船は第一次世界大戦の戦禍を避けるために諏訪丸、伏見丸、香取丸、鹿島丸を欧州航路から米国航路 (シアトル行き) に配置換えした。その際同社は東洋汽船に対抗して、この4隻にも東洋音楽学校経由で楽団を乗せることとした。したがって楽士たちは、東洋汽船の4隻と併せて合計8隻 (1919年末以降、これや丸を除く7隻) に多様な組み合わせで乗船した¹²。保坂連治は、東洋音楽学校でピアノを習っただけで、オーケストラの経験がないまま欠員補充で突然乗船することとなっ

10 たとえば、波多野福太郎はヴァイオリンとトランペット、ピアノを演奏できたと伝えられている。実際彼は、東洋音楽学校関連のコンサートではホルネットで登場したが、のちに新交響楽団ではヴァイオリン、PCL管弦楽団ではヴァイオリンと打楽器を担当した (大森1986: 157, 213, 215)。

11 保坂連治の回想によれば、天洋丸のあとを補うために導入されたこの2隻には、当初、ダンス音楽の演奏に長けたフィリピン人のバンドが乗り組んだ。日本人バンドはこれに対抗意識を燃やして腕を磨き、その結果、さいべりあ丸とこれや丸にも日本人バンドが乗り組むようになった。(保坂1982)

12 井田一郎は二つの船会社の違いについて次のように回想している。「はじめは官僚的で万事地味な日本郵船に乗った。「バンド屋」あがりのおっかない楽士ばかりだったのでビックリして下船、花月園ダンスホールに三月ほどいた。その後三越で同期だった宮田精蔵 [清蔵] の世話で、東洋汽船の天洋丸に乗船した。こっちは派手で自由、アチラ風でうれしかった。」(内田1976: 22)



鹿島丸の楽士（1919年12月
または1920年6月）

後列左から 山沢栄次郎(vc)、
長谷川長之助 (tp)

中列右 辰巳砂義一 (fl)

前列中央 保坂連治 (pf)

(保坂 s.d.)



鹿島丸 出帆時のデッキ演奏（1919年秋、ヴィクトリア）

左から上宮勝？*(vc)、井田一郎(vn)、保坂連治(pf)、吉田万之助(tp)、長岡徳三郎(cl)

(* 保坂がアルバムに示したメモでは山沢〔栄次郎〕としている。保坂 s.d.)



さいべりあ丸（1919年秋 または1920年2月）

後列左から 斉藤佐和（pf） 小野守邦（cl） 山田政吉（tp）

前列左から 小林武彦（vc） 福田宗吉（vn） （保坂 s.d.）

たが、一航海終わる頃には初見の曲をなんとかこなせるようになったと回想している（保坂 1992：61-74）。

この時期、多数の航海に楽士が乗り組む中で、ある程度メンバーの固定化がみられるようになった。その背景には、楽士の配置を簡略化できることに加えて、楽士どうしの相性の良さという要因が多分にあったものと推測される。連続して3回以上同じメンバーで乗り組んだ例として、表3に示すような組み合わせが見られる。

表3. 第3期に多く見られる楽士の組み合わせ

船名	時期	vn	vc	cl	tp	pf
諏訪丸	1918-1919	河合磯次	樋口繁治	おざわけいぞう	田山興三郎	いまむらりくろう
諏訪丸	1919	河合磯次	樋口繁治	おざわけいぞう	下川辺政次郎	いまむらりくろう
春洋丸	1919-1920	永野善三郎	中川清明	沢井操一	おかざきやのすけ	松平信博
さいべりあ丸	1919-1920	福田宗吉	小林武彦	小野守邦	山田政吉	斎藤佐和
香取丸	1920	鈴木正一	飯田實	くさかしげる	高桑慶照	山本清一
諏訪丸	1921	河合磯次	貴田邦夫	加賀田久実	丹下吉太郎	保坂連治

第4期 1922年春～

1922年3月、日本郵船の諏訪丸、伏見丸、香取丸、鹿島丸が欧州航路に復帰したため、米国航路で楽士が乗り組むのは、東洋汽船の春洋丸・天洋丸・さいべりあ丸の3隻となった。これに伴って乗船する楽士の総数はかなり減り、第1期から乗船しているメンバーは河合磯次だけとなった。この時期で特徴的なのは、春洋丸は河合磯次(vn, pf)、天洋丸は永野善三郎(vn)、さいべりあ丸は小林武彦(vc)または丹下吉太郎(tp)が楽長を務め、常に乗務している各楽長の下で楽員が入れ替わるというシステムが見られることである。この時期に新しく加わった主要なメンバーとして、大熊次郎(vc)、佐藤友吉(vn, 東洋卒業生)、長汐壽治(vc, 東洋卒業生)、上田仁(pf, 東洋卒業生)、古沢久元(vn, 東洋卒業生)が挙げられる。

中でも春洋丸のメンバーは固定化し、1923年10月から1924年7月までの約1年間は、表4に示すメンバーが演奏した。

表4. 第4期に多く見られる楽士の組み合わせ

船名	時期	vn	vc	cl	tp	pf
春洋丸	1923-24	河合磯次	長汐壽治	北村保次郎	佐伯喜一郎	保坂連治

これに対して、天洋丸とさいべりあ丸ではこのようなメンバーの固定化傾向は見られず、メンバーは航海ごとに少しずつ入れ替わった。さらに永野と丹下の引退にともなって、1924年後半には楽長を明示しないメンバー構成となった。

第5期 1925年春～

1925年の春からは、春洋丸は保坂連治(pf)、天洋丸を河合磯次(vn, pf)、さいべりあ丸を山下梅吉(vc)が率いる形が定着した。1926年3月には東洋汽船が日本郵船に吸収されたが、楽士の供給状況に大きな変化はなかった。1926年夏に保坂が引退した後は、春洋丸は山本清一が、天洋丸は河合磯次が、そしてさいべりあ丸は山下梅吉¹³が中心となり、その下で楽士がこまめに入れ替わるという様相が続いた。

第4期の春洋丸と同様、河合磯次が楽長を務めた天洋丸では、3回連続して同じ楽士が乗り組んだ例として、表5のような組み合わせが見られた。

表5. 第5期に多く見られる楽士の組み合わせ

船名	時期	vn/pf		cl		
天洋丸	1926	河合磯次	やまな じょうぞう	加藤操	おぜきりょうたろう [tp]	はら かずよし
天洋丸	1927	河合磯次	しらかわ ゆたか	加藤操	こだかつねのり	ふせ まさお
天洋丸	1928	河合磯次	しらかわ ゆたか	加藤操	にしがき てつお	ながただお

13 山下梅吉はチェロを弾いたと考えられるため、のちにPCL管弦楽団と東京放送管弦楽団で活動したチェロ奏者の山下梅夫と同一人物である可能性がある。しかし、「やました うめお」の名前では、この時期に乗り組んだ記録はまったく残っていないため、同定はできない。

これに対して、春洋丸とさいべりあ丸ではメンバーは航海ごとに少しずつ入れ替わった。

山下梅吉と東洋音楽学校との直接的関係を示す資料は残されていないが、山下以外の楽長3名（保坂、河合、山本）が東洋音楽学校の卒業生であることは、当然のことながら、日本郵船と東洋音楽学校との契約関係を反映してのことであろう。この時期に加わったメンバーとして注目されるのは、水野長次郎（tp）、黒沢健雄（cl？、三越少年音楽隊）、斉藤広義（tp、大阪三越少年音楽隊）、新野輝雄（cl、浅草派）であり、いずれも東洋音楽学校との関係を示す資料は見当たらない。その他のメンバーは氏名がわかってもその後の国内での活動が不明であるため、氏名の漢字表記と担当楽器がわからないケースが多いことも、この時期の特徴と言える。

この時期の演奏楽曲を示す資料として、保坂連治が残した演奏プログラムのゲラ刷りが残っている。これは、1925年7月の春洋丸の一航海（横浜―サンフランシスコ間往復）の間に船上でディナーの際に演奏されたプログラム49回分であり、そこから実際に演奏された具体的な曲目を知ることができる（東京音楽大学附属図書館所蔵；武石2005：40-41）。マーチ、ワルツ、バレエ音楽、オペラの抜粋、フォックストロットの組み合わせを基本として、それに長唄など日本の旋律を加えてプログラムが構成された。この航海に乗り組み上記のプログラムを実際に演奏した楽士は、いとうえいぞう（vn）、長汐壽治（vc）、高麗貞通（fl）、佐伯喜一郎（tp）、保坂連治（pf、楽長）の5名であった。この資料は、第5期に船上で演奏された楽曲について唯一現存する情報源として大変貴重である¹⁴。保坂連治は1918年から8年間船に乗った間の演奏曲目の推移について、「[クラシック中心で始まったがアメリカ滞在中にどんどん新しい楽譜を買って演奏したことにより]、タンゴ、ツーステップ、ワンステップ、フォックストロット、ブルースと進み、楽器もサクソ、ウクレレ、バンジョー、打楽器ではウッドブロック、木魚、マラカス、コンガなど南米系統が多分に取り入れられ、ルンバ、サンバと限りなく移り変わっていった」と回想している（保坂1982）。

4. 下船後の経歴のパターン

早期に下船した人々

第1期に乗船していたメンバーのうち、次の5名は1910年代後半に船の楽士を辞め、国内での音楽活動に入った。その主な行先は、劇場と映画館である。

1916年5月に帝国劇場歌劇部が解散され、秋にはジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ロージ(1867-1940)の率いるローヤル館が開場、1917年には歌舞劇協会（常盤座）や東京歌劇座（日本館）でいわゆる浅草オペラの上演が始まった。各劇場で10数名のオーケストラを擁し、新作やイタリアオペラの抜粋演奏を行うための演奏者・指揮者・編曲者が必要とされる状況の中で、篠原正雄（1914年末下船）はロージの地方公演の指揮者を皮切りに、日本館や金龍館の指揮者・編

14 ただし、本論文で考察の対象とする303航海分の1航海分ではしかないことを考えると、この資料だけをもって全5期の船上の音楽の全容を論ずることはできない。

曲者を務めた。他方、澤田柳吉（1913年末下船）は下船後、ショパン弾きのピアニストとして独奏会を行う等、個人で演奏を続けたが、その活動の中には、クラシック音楽の紹介を目的とする浅草オペラの舞台での名曲演奏も含まれていた（多田2011：24-25）。

これに対して、映画館での活動を出発点としたのは波多野兄弟、奥山貞吉の3名である。当時は無声映画であったため、小オーケストラが映画の伴奏と奏楽を担当した。映画館の楽団は、最初はピアノ1名、あるいはピアノと多楽器の組み合わせで3名といった具合に小編成であったが、次第に12名ほどの編成へと拡大されていった。波多野福太郎と波多野鏖次郎の兄弟は（1918年下船）は、銀座のこんぼる金春館でハタノ・オーケストラ¹⁵として洋画の伴奏と休憩奏楽で評判となった。ハタノ・オーケストラは特定の映画館の専属ではなく、1921年以降は花月園（ダンスホールの嚆矢：ここでの演奏が日本ジャズの萌芽へと結びついていく）や東洋キネマ、帝国ホテルへと場所を移し、常に優秀な楽員を集めて小オーケストラの演奏を続けた。奥山貞吉（1918年下船）も当初は金春館でハタノ・オーケストラに加わり、その後は金龍館で篠原正雄とともに指揮・編曲・作曲を行い、さらに帝国ホテルのハタノ・オーケストラにも参加する等、並行して多様なキャリアを兼任した。

大正期の東京では、浅草派を中心とする民間音楽団が演奏者を養成しかつ派遣する役割を果たしていたが、早期に船を下りた篠原・奥山・波多野兄弟は、東洋音楽学校出身でありながら民間音楽団の出身者とともに大日本音楽団の幹部となり、東京における演奏者派遣システムの中で地歩を占めた（大森1986：99-103）。彼らの存在は、続いて下船して東京で演奏活動しようとする船の楽士たちのキャリアを手助けする役割を果たしたと言えよう。

1920年代初頭 映画館の指揮者・作曲家

松平信博（1920年下船）の下船直後の状況は不明であるが、1924年には日活の作曲家として邦画のための伴奏音楽の選曲と作曲を担当した。洋画館では欧米での前例にしたがって小オーケストラで既存の楽曲を選曲・演奏したが、邦画館では邦楽器で奏楽をするのか、洋楽器で邦画にふさわしい楽曲をどう選曲・作曲するのが大きな課題となっていた。松平信博は邦画のための作曲家として先駆的な役割を果たすこととなる。

これに対して、以下の5名は、洋画の伴奏音楽と休憩奏楽の指揮者として活動した。笹井生（1917年下船）は、下船直後の活動は不明であるが、1923年より京都の松竹座の楽長を長く務めた。長谷川長之助（秋甫；1921年下船）と貫洞喜代治（1922年下船）は1923年から武蔵野館に長く務め、指揮、演奏と曲目選定を担当した。同様に鈴木正一（1921年下船）は1924年以降東洋キネマと目黒キネマで、福田宗吉（1922年下船）は金春館や千代田館で楽長を務めた。

15 ハタノ・オーケストラのメンバーと活動場所は、年代とともに多様に変化した。詳しくは武石2006を参照。

ハタノ・オーケストラから交響楽団へ

1920年代前半になって下船した人々にとっては、国内で音楽活動を始めるうえで、ハタノ・オーケストラに入るという選択肢が加わった。前田璣、上宮勝、大津三郎、北川嘉納、宮田清蔵、中村鉦次郎らは、花月園や東洋キネマでハタノ・オーケストラに参加し、1925年には波多野鏐次郎とともに日露交驩交響管弦楽大演奏会に出演した。その時に共演したロシア人演奏家の音に大きく触発された結果、彼らは当時山田耕柁（1886-1965）と近衛秀麿（1898-1973）が率いた交響楽運動に共鳴し、1926年には日本交響楽協会、1927年には新交響楽団に入団して管弦楽曲の演奏に取り組んだ。この時先達となった波多野兄弟のうち、波多野福太郎は新交響楽団に入団したが、波多野鏐次郎はすでに帝国ホテルで専属演奏をしていたハタノ・オーケストラの活動を継続し、交響楽団には入団しなかった。また、当時の交響楽団員の収入は十分でなかったため、楽団員の一部は、引き続き、空き時間に映画館での演奏の仕事も兼業した。

宝塚少女歌劇と松竹楽劇部

関西で楽士が演奏できる楽団として、宝塚少女歌劇の楽団¹⁶は歌劇伴奏の他に1924年からシンフォニー・コンサートを行うようになり、1926年以降は宝塚交響楽協会としてヨーゼフ・ラスカ（1886-1964）の指揮のもとに定期演奏会を開くようになった。ここに参加した船の楽士出身者は永野善三郎、奥村兵造と山田敬一の3名である¹⁷。加えて、1922年以降は松竹楽劇部にもオーケストラが設けられた。田中平三郎は松竹楽劇部のコンサートマスターを経て、1925年にJOBK（大阪放送局）オーケストラの初代コンサートマスターとなり、同時に大阪音楽学校（現大阪音楽大学）でヴァイオリンの教授となった（岡野1995：181）。塩尻精八は松竹楽劇部にとどまり多様な作曲を行うとともに、関西のダンスホールのバンドにも加わった。

松竹楽劇部で活動した人々の多くはそこに定着することなく、多様なキャリアをたどっている。たとえば、高桑慶照は松竹楽劇部から日本交響楽協会・新交響楽団を経て、帝国ホテルのハタノ・オーケストラに所属した。反対に、辻井富造は松竹楽劇部からハタノ・オーケストラを経て日本交響楽協会・新交響楽団へと進んだ。

松竹楽劇部を経由してジャズへの道を進んだ人の経歴も多様である。斉藤広義は、松竹楽劇部を辞したのちに日本交響楽協会・新交響楽団に入り、その前後に船の楽士を経験して、下船後はジャズの演奏に進んだ。日本ジャズの成立に重要な役割を果たしたのが井田一郎である。船から下りたのち、花月園バンドで演奏し、宝塚少女歌劇、松竹楽劇部へと活動場所を移す中でジャズの演奏の場を求め、副業としてダンス・ホールにも進出し、1925年に大阪のユニオン・

16 1914年に公演を開始した宝塚少女歌劇のオーケストラは、当初、少女団員と教員を中心とするものであった。1923年以前のメンバーの推移についての詳細は不明である。（根岸2012：36-53；大森1986：163）

17 1924年2月8日の第1回宝塚シンフォニー・コンサートに関する手書きメモ、同年6月21、22日の第2回コンサートのプログラム、1925年8月20日のシンフォニー大演奏会予告記事（『歌劇』65、84-85）、1928年7月21日の定期演奏会のプログラムに、それぞれ演奏者の名前が記されている。これらの資料（根岸2012：47-52）とその内容については、根岸一美氏よりご教示いただいた。

ダンスホールでチェリーランド・ダンス・オーケストラ¹⁸を結成して好評を博した。井田はその後、関東大震災後の東京にも進出して、ジャズの普及に貢献した。前野港造は、下船後、ハタノ・オーケストラから松竹楽劇部を経たのち、井田のチェリーランド・ダンス・オーケストラに加わって、日本のジャズ・サックスの嚆矢となった。菊地博と川口養之助も、同様に松竹楽劇部からジャズとダンス音楽の演奏へと進んだ。

直接交響楽団に入団

交響楽運動が盛り上がりを見せた1925年頃に船を下りた人々の中には、映画館や劇場の楽団に加わることなく直接交響楽団に入団した者も多い。たとえば上田仁、黒沢健雄、佐藤友吉、丹下吉三郎、長汐壽治、古沢久元らがそれに当たる。彼らが日本交響楽協会から新交響楽団へと進んだのに対して、松原興輔は日本交響楽協会に入団したが、日響分裂時に新交響楽団に入らず日本交響楽協会にとどまったため、のちに方向を転換してタンゴの演奏者として活動した。

直接ジャズ・ダンスホールの世界へ

1925年頃に船を下りたメンバーの中でジャズや軽音楽を好む人々は、交響楽団ではなく、ダンスホールでの演奏活動に入った。たとえば、薬丸晃、鈴木福次郎、新野輝雄、水野長次郎らがその例である。斉藤佐和は日本国内ではなく、奉天および大連のダンスホールで活動した。

こうした人々に対して、保坂連治（1926年下船）のように演奏活動を辞め、1928年から小学校の音楽教員となった例もみられる。また第1期から第5期まで最も長期にわたり船に乗り組んだ河合磯次に関しては、引退後にどのような活動をしたかは不明である。

5. 1920～1930年代の国内音楽界での位置づけ

本論文で扱う年代の中で、1925年という年は、日露交驩交響管弦楽大演奏会を契機に交響楽運動が起こった年であり、また井田一郎のチェリーランド・ダンス・オーケストラによるジャズの萌芽があり、さらに加えてラジオ放送が開始されたことにより、音楽メディアの上での転換点ともなった年である。そこで、1925年頃から漸次分化・拡大していった多様な音楽の場の各所において、船の楽士出身者が果たした役割について考察する。

交響楽団

交響楽運動の高まりの中で、初期の交響楽団に参加した楽士の中で乗船経験のある人々の割

18 山田和一 (tp)、小畑光之 (tp)、前野港造 (sax)、高見友祥 (sax)、平茂夫 (pf)、山口豊三郎 (drum)、井田一郎 (banjo, vn) の7人編成 (内田 1976: 49)。このうち井田一郎と前野港造の2人が船の経験者であり、小畑光之と山口豊三郎はその後1930年代に日米航路に乗船して演奏した。

合は目立って多く、表6に示すとおり、約40%であった。その要因として、船の楽士には乗船時に多様なジャンルの楽曲を演奏した経験があること、複数回の渡米時にオペラや管弦楽の演奏を聴く機会があったため、大規模なオーケストラによる交響曲の演奏への憧れがより強かったこと、またその演奏を実現するための演奏技量があったこと、等が考えられる。

表6. 交響楽団に進んだ船の楽士

	日露交驩1925/4	日本交響楽協会1926/8	新交響楽団1927/1
vn	前田璣 波多野鏖次郎 船橋孝昌	前田璣 福田宗吉 高桑慶照 佐藤顕雄	前田璣 波多野福太郎 福田宗吉 高桑慶照 佐藤顕雄
va	中村鉦次郎	中村鉦次郎 佐藤友吉 古沢久元	中村鉦次郎 佐藤友吉 古沢久元
vc	松原興輔 北川嘉納	松原興輔 大熊次郎 長汐壽治	大熊次郎 長汐壽治
fl	宮田清蔵	宮田清蔵	宮田清蔵 高麗貞通
cl	辻井富造	辻井富造	辻井富造
fg		黒沢健雄 上田 仁	黒沢健雄 上田 仁
tp		斉藤広義	斉藤広義
hr		上宮 勝 丹下吉太郎	上宮 勝 丹下吉太郎
tb	上宮 勝 原田五郎	北川嘉納 大津三郎	北川嘉納 大津三郎
perc	大津三郎		
割合	11/39=28%	19/47=40%	20/49=41%

大森 1986：150

『交響楽』2/1（1926/9）

『1月演奏会 曲目と解説』（1927/1）

他方、東京に先んじてシンフォニー・コンサートを開始した宝塚交響楽団では、船の出身者は前述のとおり、永野善三郎と奥村兵造、山田敬一の3名のみであり、55～60名の団員の約5%を占めるに過ぎなかった点で対照的である（大森1986：162；注17参照）。

劇場

初期の下船者である篠原正雄と奥山貞吉らが浅草オペラに貢献したこと以外については、大正期の劇場オーケストラのメンバーを示す現存資料は乏しく、特に東京の劇場については、関東大震災のために資料が消失している。大阪で1923年から興行を開始した松竹楽劇部では、宝塚少女歌劇に対抗して優秀な奏者が集められ、1924年の関東大震災以降は関東からも奏者が参加するようになった（大森 1986：132-133）。大森が挙げた昭和初期までの松竹楽劇部オーケ

ストラのメンバー47名のうち、田中平三郎と井田一郎、高桑慶照、辻井富造、前野港造、斉藤広義、菊地博と塩尻精八の8名（17%）が船の楽士経験者である。ただし彼らは長期間松竹にとどまることなく、その後多様な履歴をたどった。

ジャズ、ダンス音楽

この分野では、1925年に井田一郎が大阪で前野港造らをメンバーとしてチェリーランド・ダンス・オーケストラを結成したが、ジャズ流行の発端となった。大森盛太郎は、当時の各地のジャズ系楽団のメンバーを綿密に記録している。その中で船の楽士経験者は表7に示す13名で、割合としてはジャズ演奏者の1割にも満たないが、井田をはじめとして、中心的な役割を果たした人物が含まれている（大森1986：164-192 ★は外地で活動）。

表7. ジャズに進んだ船の楽士

楽器	演奏者		
vn	井田一郎	磯部桂之助	
vc	松原興輔	原田五郎★	
sax	前野港造	新野輝雄	鈴木福次郎
tp	水野長次郎	薬丸晃★	
tb	相沢斐雄		
pf	菊地 博	塩尻精八	斉藤佐和★

宮崎鐵雄は、日本のタンゴ楽団の母体は山田耕作が率いた日本交響楽協会であると指摘し、「日本のタンゴ楽団の先駆者である松原興輔、宗知康、吉野章、前田璣、浅野太郎、上田仁、久岡幸一郎等は、皆日響、新響等の有用なる楽員であった」と述べている（宮崎 1940：42）。ここに挙げられている7名のうち、松原、前田、上田の3

名が船の楽士の経験者である。このように、当時はダンス音楽やジャズと交響楽団の間の隔てがなく、同一人物が様々な所に顔を出す様子が見て取れる。それを示す一例が、1931年に新交響楽団から派生したコロナ・オーケストラがシンフォニック・ジャズの演奏で好評を博したという事実である。コロナ・オーケストラのメンバーには、船の楽士を経験した福田宗吉、佐藤顕雄、波多野福太郎、古沢久元、高麗貞通が含まれていた（内田1976：89）。

内田晃一は「戦前派ミュージシャン略歴紹介」として、ジャズの草創期に重要な役割を果たした音楽家107名を挙げている（内田1976：364-395）が、その中で船の楽士の経験者は14名、すなわち全体の13%にあたる。

種々のメディア

① 映画

大正期には無声映画の伴奏と休憩音楽が生演奏であったため、船の楽士の経験者の多くは、洋画の上演館において奏者として活動し、一般市民に管弦楽を聴く機会を提供する役割を果たした。しかし、多くの映画館が存在した中で、船の楽士経験者が活動した映画館の数は限られていた¹⁹。前述のとおり、その中で松平信博は洋画館で既存の洋楽曲を演奏するのではなく、1924

19 彼らが所属した映画館と楽士の組み合わせの詳細については、別稿において論じたい。

年から日活作曲部で、邦画の伴奏にふさわしい楽曲の選曲と作曲を担当し、トーキー導入後は映画音楽の作曲家として先駆的な存在となった。同様に、トーキー導入後に日活の作曲家となった船の楽士出身者に、福田宗吉と宇賀神光男（美津雄）がいる。

1929年頃からトーキーが導入されて、無声映画の伴奏が必要なくなったため、映画館で活動した楽士の多くは職を失うこととなった。映画会社はトーキー映画制作のために専属の楽団を必要とするようになり、1933年にはPCL管弦楽団が結成されることになる。そこには交響楽団に進んだグループから、波多野福太郎と古沢久元（コロナ・オーケストラから）、斉藤広義（新交響楽団から）、高桑慶照（新交響楽団を経て帝国ホテルのハタノ・オーケストラから）、そして新野輝雄（ジャズ・バンドから）といった船の楽士出身者がメンバーとして加わった（内田1976：90-91）。

② ラジオ

1925年から試験放送が始まり、当時はすべて生放送であったため、音楽番組での演奏は日本交響楽協会と新交響楽団の楽員が受け持った。新交響楽団の一部の楽員は軽音楽やジャズの演奏も行ったが、そのメンバーには船を経験した上田仁、前田璣、長汐壽治、辻井富造、斉藤広義も含まれていた（内田1976：92）。1931年以降は前述のコロナ・オーケストラが軽音楽番組の演奏を担当し、1935年の東京放送管弦楽団設立へと至ることとなる。

③ レコード

1927年に日本ビクター蓄音器、日本ポリドール蓄音器商会、1928年に日本コロムビア蓄音器、1930年に太平蓄音器、1931年にキング・レコードと帝国蓄音器商会等が次々に設立され、レコードの国内生産が盛になると、各レコード会社はそれぞれ録音のための専属オーケストラや歌手、作曲家と契約した。その中で船の楽士経験者は、表8に挙げるとおりである（大森1986：196-209）。

表8. レコード会社専属となった船の楽士

コロムビア	ビクター	ポリドール	キング	テイチク	タイハイ
奥山貞吉 作曲	松平信博 作曲				
井田一郎 作曲	井田一郎 作曲	井田一郎 作曲			
塩尻精八 作曲	塩尻精八 作曲	菊地博 作曲, pf		菊地博 作曲	
佐藤友吉 vn		前田璣 vn			
		海老沢東一 vn	海老沢東一 vn		
宮田清蔵 fl		高麗貞通 fl			
上田仁 pf		鈴木福次郎 sax			鈴木福次郎 sax
布施正男 pf		新野輝雄 sax		新野輝雄 sax	

これらの人々は前述の諸分野・諸団体にも見られることから、昭和初期には演奏者の活動場所が多岐に渡り、演奏ジャンル間の壁は高いものではなく、多ジャンルにまたがって活動することがむしろ常態であったことが見てとれる。

総括

1912年に開始された日米航路の船の楽団演奏は、東洋音楽学校の卒業生のみならず、他の場で楽器を学んだ人々にとっても、演奏経験を積み技量を磨くために得がたい実地訓練の場であった。多様な楽曲を組み合わせて5つの楽器で演奏する船上の経験により、広範なレパートリーに加えて、初見演奏、即興、編曲、そしてアンサンブルの能力がはぐくまれたため、この調査で下船後の活動が確認できた90名の船の楽士出身者は、引退後も多様な場で演奏や作曲の能力を発揮したことがわかった。1925年頃から、日本の洋楽界にはクラシック、ジャズ、ダンス音楽、通俗曲といったジャンルの分化が見え始めるが、それぞれの分野において船の楽士出身者が見られること、特に交響楽団において船の楽士出身者が40%という割合で見られることは注目に値する。昭和初期に、ラジオ放送やレコード、映画とメディアが多様化していく中で、船の楽士出身者たちの多くが所属を一つに定めることなく、多ジャンルにまたがって活動していることも、ジャンル分化が進んでいないこの時期の特徴である。洋楽受容史においてはこれまで個人で名を成した作曲家や独奏者・独唱者が注目されてきたが、すべてが生演奏であった時代に、船の楽士の経験者たちは、管弦楽曲、室内楽、ダンス音楽、ジャズ、歌謡曲の伴奏、映画音楽、放送、レコード等、多岐にわたる音楽の場を生み出し、支えるという点で重要な役割を果たした。本論文で明示した彼らの氏名と情報が、大正～昭和初期の洋楽受容に関するさらなる研究の基盤となれば幸いである。

(本学教授＝音楽学担当)

参考文献

- 井田一郎 1939/1940 「日本ジャズ音楽側面史」(6)(7)(8)(完)『ヴァラエティ』7/8, 33-37(6) ; 7/9, 36-41(7) ; 7/10, 16-21(8) ; 8/1, 16-18(完)
- 内田晃一 1976 『日本のジャズ史 戦前・戦後』 東京：スイングジャーナル
- 大森盛太郎 1986 『日本の洋楽』第1巻 東京：新門出版社
- 岡野弁 1995 『メッテル先生 朝比奈隆・服部良一の楽父、亡命ウクライナ人指揮者の生涯』 東京：リットーミュージック
- 楽水会(編) 1984 『海軍軍楽隊—日本洋楽史の原典』 東京：国書刊行会
- 紙恭輔 1957「あのころのジャズ②～⑧」『東京新聞』1957/10/5②, 1957/10/7③-12⑧, (夕刊), 5
- 柴田康太郎 2017 「日活作曲部における松平信博の無声映画伴奏—純映画劇運動への音楽的応答」『演劇研究』40, 131-151
- 須藤元吉 1997 『明治の陸軍軍楽隊員たち 吹奏楽黎明期の先達』 安中：陸軍軍楽隊の記録刊行会
- 武石みどり 2005 「明治・大正期の東洋音楽学校—演奏に関連する記録・資料」『東京音楽大

学研究紀要』29, 27-48

2006 「ハタノ・オーケストラの実態と功績」『お茶の水音楽論集』特別号 363-373.

2007 『音楽教育の礎』東京：春秋社

多田純一 2011 「澤田柳吉（1886-1936）の音楽活動と日本におけるショパン受容」『音楽表現学』9, 13-30.

東京音楽大学（編）1972 『東京音楽大学65年史』東京：東京音楽大学

徳川夢声 1957 『くらがり二十年』東京：春陽堂書店

日外アソシエーツ編集部（編）1998 『芸能人物事典 明治大正昭和』東京：日外アソシエーツ

波多野鏐次郎 1942 「民衆音楽の時代を語る」『音楽之友』2/10, 100-105.

保坂連治 1992 『明治から平成まで 歩いてきた道』神戸：交友プランニングセンター

宮崎鐵雄 1940 「タンゴ夜話 山田耕作と櫻井潔を語る」『ヴァラエティ』8/5, 42-43.

毛利真人 2010 『ニッポン・スウィングタイム』東京：講談社

著者無記名の記事

「楽長調べ」「代表的活動常設館洋楽部一覧」『活動画報』2/12（1918），20-23

「西洋気分の金春館」『活動雑誌』5/10（1919），162-163

「東洋キネマ音楽団同人合評」『活動画報』7/6（1923），38-39

「武蔵野館音楽団同人合評」『活動画報』7/7（1923），64-68

「浅草電気館音楽団合評」『活動画報』7/8（1923），117-121

「キネマ倶楽部音楽団合評」『活動画報』7/9（1923），83-85

「楽士名簿」『日本映画年鑑 大正十三、四年』（1925）東京：朝日新聞社，294-340

雑誌

『映画音楽愚談雑誌 錯覚』（シネマパレス）1/1-6（1925），2/1（1926）

一次資料

米国入国記録データベース（immigration records）www.ancestry.com

映画館週報（早稲田大学演劇博物館 東京国立近代美術館フィルムセンター 新宿区歴史博物館 所蔵）

海軍・陸軍軍楽隊データベース（東京藝術大学塚原康子先生研究室）

東京音楽学校一覧（明治42年～昭和5年，国立国会図書館デジタルコレクション）

日本郵船株式会社「東洋音楽学校 楽手供給請負契約書」昭和5年、昭和13年、昭和15年
（日本郵船歴史博物館 所蔵）

波多野鏐次郎資料（個人蔵）

保坂連治 1982 [昭和57年1月3日稿]（手稿）東京音楽大学附属図書館所蔵

s. d. [写真アルバム] 東京音楽大学付属図書館所蔵

謝辞：論文作成にあたり、新野洋子様(新野輝雄氏の姪御様)、塚原康子先生(東京藝術大学)、根岸一美先生(大阪大学名誉教授)、橋本久美子先生(東京藝術大学音楽学部大学史資料室)に情報を提供していただきました。ここに記し、心より感謝申し上げます。

(科学研究費・基盤研究 (C) 18K00141による研究)